

## 第 72 回 近 畿 地 区 卒 業 設 計 コ ン ク ー ル 応 募 作 品 一 覧

平成 3 0 年 4 月 1 3 日  
日本建築学会近畿支部

《 短 大 ・ 高 専 ・ 専 修 学 校 の 部 》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面枚数
1	『約束の丘』 —災害と向き合う人々の自然共生のあり方—	村上 裕康	京都建築大学校 建築学科	5
2	A+Hcard	木村 智子	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	25+箱
3	<u>おさなき日のいろどり</u> —これからの小児医療のカタチ—	森上 寛菜	明石工業高等専門学校 建築学科	6
4	西脇小中一貫教育学校 ～自然と共に学ぶ～	カラギアニス マーシャル 謙太郎	修成建設専門学校 建築学科	10
5	MoMAiK Museum of MAGRITTE Art in KYOTO	清水 康佑	京都建築専門学校 建築科二部	15
6	なにわ筋線 中之島駅 《日常》の解体	中森 陽介	中央工学校OSAKA 建築学科	7
7	<u>『ひずるしい未来へ』</u>	清水 梨帆	京都建築大学校 建築専攻科	6
8	夢建築	鈴木 麻由	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	37
9	大阪駅前ビル跡地利用計画	松村 和樹	京都建築大学校 建築学科	10
10	<u>MOTOKOH3</u> RE:元町高架通商店街	檀野 航	明石工業高等専門学校 建築学科	8
11	『5時46分』 —選べない2つの道—	黒河 美里	京都建築大学校 建築専攻科	7

(受付順) 以上11点<No. 欄に○印のものは入選作品>

《 工 業 高 校 建 築 科 の 部 》

No.	作 品 名	学生氏名	所 属	図面枚数
1	Project:Sasanqua —歌島橋交差点改造計画 (案) —	阿部 隼人	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	6
2	<u>はざま</u> ～もう一度行きたい場所～	加藤あまね	兵庫県立兵庫工業高等学校 建築科	9
3	小学校	源内 拓人	奈良県立奈良朱雀高等学校 建築工学科	10
4	3D PARK	太田 達稀	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	3
5	<u>保育園</u>	田中 宏樹	奈良県立奈良朱雀高等学校 建築工学科	7
6	黒い湖に石を投げ込む	塩谷 智哉	大阪市立都島工業高等学校 建築科	5

(受付順) 以上6点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部  
平成29年度近畿地区短大・高専・専修学校並びに工業高校  
卒業設計コンクール（第72回）審査報告

平成30年4月13日（金） 審査会場：大阪中央公会堂 地下1階 展示室

審査員長（互選） 大影 佳史  
審査員（50音順） 槻橋 修・中村 潔・畑 友洋・前田 茂樹・松原 茂樹・柳沢 究  
応募作品 短大・高専・専修学校の部11点、工業高校の部6点（別紙参照）

### 審査経過と審査講評

審査を始めるにあたり、コンクールの主旨と審査に関する内規、前年度の実績と本年度の応募状況を確認した。

はじめに、互選により審査委員長の選定を行った。審査員7名のうち1名が欠席、参加した6名の審査委員から互選により審査委員長を選定し、審査を進める事とした。

まず、昨年度の審査方法を確認し、今年度の審査方法について協議をおこなった。本年度は、短大・高専・専修学校の部は応募作品が11作品と昨年度と同数であり、昨年同様に3作品を上限に入選作品を選ぶ方針とした。また工業高校の部は応募作品が6作品と昨年度の応募数（3作品）より増え、今年度は2作品を上限に入選作品を選ぶ方針とした。

選出については、各審査員が各自で全作品を閲覧した上で、短大・高専・専修学校の部については各自3作品、工業高校の部については各自2作品を選んで投票し、その後、投票結果を踏まえて全員で審議をおこない入選作品を決定する事とした。

投票の結果、短大・高専・専修学校の部は、No.10が6票、No.3が5票と、多数票を集めたため、まず、これらの2作品を入選作品とすることについて、全員で確認し賛同を得た。次に、得票のあったNo.1、2、7、9の中から、1作品を選出することとし、これらの作品について議論をおこなった結果、No.7を入選作品とすることで全員の合意を得た。入選作品についての講評は各選評に譲り、ここでは惜しくも選外となった作品について触れておく。No.1は、防災、自然共生といった今日的なテーマ設定や地域の声を取り入れるというプロセスが評価されたが、提示された建築や空間像のスケールやアイデアの点で一步入選には及ばなかった。No.9は、都市的なサイトに積極的に挑んでいる点や、造形力が評価されたが、広場の位置付けについての疑問や、建築の設計密度の点で、入選に及ばなかった。No.2のCardを用いた提案は、具体的な建築や空間の設計にいたっておらず、建築としての評価には結びつかなかった。ただし、プロダクトデザインとしてや、具体的空間設計の前段階のデザイン行為として高い評価があったことを付記しておく。

工業高校の部では、No.2が5票を集めたため、まず、この1作品を入選作品とすることについて、全員で確認し賛同を得た。次に、得票のあったNo.1、4、5、6の中から、1作品を選出することとし、これらの作品について議論をおこなった結果、No.5を入選作品とすることで全員の合意を得た。こちらも、入選作品についての講評は各選評に譲り、惜しくも選外となった作品について触れる。No.1は、交差点上に提案する構想の大きさが評価される一方で、構想の緻密さや景観上の配慮の不足が指摘され、入選に及ばなかった。No.6は、作者の社会的問題意識は評価する声があったが、プランのアイデアや新しさの面で、評価にはいたらなかった。No.4は立体的に公園を結ぶアイデアや、図面の表現力が評価されたが、つないだに留まっている印象、空間にもう少し工夫があればとの声があった。

以上から、短大・高専・専修学校の部では、11作品中の3作品を、工業高校の部では6作品中の2作品を、入選作品とした。

本年度の応募作品数は、先に述べたとおり、短大・高専・専修学校の部で11作品、工業高校の部で6作品と、決して多いとは言えない状況であったが、今後も多くの学生達の卒業設計への取り組みを、そして応募作品のさらなる増加を期待したい。応募作品の傾向については様々であり、本年度は特筆すべき傾向はみられないように思われた。なお、上記で触れられなかった作品についても、それぞれに優れた点、評価できる点を確認され、作者の取り組みにたいする姿勢、想いやエネルギーが感じられる力作揃いであったことを記しておく。入選の如何に関わらず作者のみなさんには、それぞれに今後の活躍を期待したい。

（大影）

## おさなき日のいろどり —これからの小児医療のカタチ—

森上 寛菜君 (明石工業高等専門学校)

小児医療の置かれている環境や医療面での親子への支援の乏しさをリサーチし、新しい小児医療の建築の提案を行った作品である。大きく評価した点は、1)明快な空間構成で建築の計画ができている点、2)きめ細かく設計ができている点、3)プレゼンテーションが優れている点である。

1点目について、機能が複合していて、敷地の手前に育児支援を配置し、奥に進むにつれ機能が高度化し、敷地の奥に病室を配置する空間構成であるが、中庭で全体をつなぎ規模が大きいにもかかわらずわかりやすさと、入院児と通院児との接点を生み出すことに成功している。2点目について、集団で過ごすさまざまな規模の場所を配置するだけでなく、隙間に1人で過ごすことができるような居場所をいくつも配置したり、子どもの遊びを誘発する仕掛けを用意するなどきめ細かく設計ができている、全体としての完成度が高い。3点目について、計画・設計したことを明確に伝えるために丁寧に表現していて、実際に子供たちがいきいきと過ごす光景が目浮かぶものがあった。以上の点から力量のある作品として評価した。

(松原)

## 『ひずるしい未来へ』

清水 梨帆君 (京都建築大学校)

「引きこもり」となった人々の社会への復帰を、自給自足の農業を軸とした共同生活により実現する施設の提案である。敷地は静岡の広漠とした耕作放棄地に設定され、農地としての再生と入所者の社会性の回復とが重ねられている。「ひずるしい」とは「輝かしい」という意の遠州方言であるという。

重度の引きこもりから回復する3段階のプロセスに空間の段階的構成を対応させつつ、そのままでは固くなりがちな構成を、流れるような平面形状によりうまくやわらげている。個人スペースと共有空間の接続が回復段階ごとに丁寧にデザインされているところに、作者の本テーマへの洞察が伺われる。ただし共有空間はやや単調であり、開放的な敷地で農業に従事するという設定にもかかわらず、屋外との関係があまり考慮されていない点は気にかかる。不定形の平面を統合しながら壮大な風景に溶け込む魅力的な屋根架構が、建築の内外において十分に意識・表現されていないのは残念であった。しかしながら、社会的な問題意識に基づきながら、その思いを素直に建築の空間的魅力に結実させた佳作である。

(柳沢)

## MOTOKOH3 RE:元町高架通商店街

檀野 航君 (明石工業高等専門学校)

「モトコー」と呼ばれ長く愛されてきた神戸・元町高架通商店街は神戸の商業空間において裏通りの存在としてマニアや外国人の姿が多く見られる通りであるが、現在 JR 西日本による耐震改修工事をひかえ、大きな変化を迎えようとしている。戦後70年以上にわたって形成されてきた空間が独自の場所性を構築しているが、本計画ではこうしたモトコーに実在する特徴的な店舗(八百屋・ライブハウス)を事例として取り上げ、詳細なフィールドワークをもとに、空間的特徴のみならず、その空間の運営・活用方法にも着目して、これらの空間に重ねられてきた記憶を抽出・モデル化することで、改修後は再度構築される高架下の空間に、商業空間の記憶を含めて再導入する方法を提案するものである。デザインサーヴェイを用いた空間資源の再導入手法や、2つのサンプル以外の空間の位置付けに関して、より深く取り組んで行くことのできるテーマである。

(槻橋)

## はざま ～もう一度行きたい場所～

加藤あまね君（兵庫県立兵庫工業高等学校）

瀬戸内をめぐる日常と非日常をめぐる体験を設計した作品。何かと何かの「間」を顕在化させ、設計対象とする発想がユニークであり、同時に根源的には日本的な空間認識の共通性を想起させる。設計された建築そのものは、やや既視感があるようにも見受けられ、作者の今後の更なる創造性に期待したいところであるが、敷地の選定を含めたテーマ設定に一貫性があり、そのテーマに基づき紡がれたストーリーは魅力的であり評価された。  
(畑)

## 保育園

田中 宏樹君（奈良県立奈良朱雀高等学校）

一見単調なシンメトリーの構成に見える保育園の計画案であるが、保育室、職員室、特別室などの配置は計画的にも適切な関係で行われていて、さらによく見ていくと、南側の園庭をコの字型に囲んだ形で、園庭／テラス／保育室／ホール／特別室が同心円状に配置されている。共用空間と専用空間を交互に並べることで室空間を開放的にし、また個々のヴォリュームを雁行させて、共用空間のテラスやホールを連続しながらも分節された溜りと流れのある空間とすることで、子供たちの遊び場にふさわしい形を創出している。屋根の形状は平面的にはコの字の平面に対応して棟がコの字にかけられ、断面的には差し掛け屋根になっている。高い位置に連続して設けられたハイサイドライトから入ってくる光は、適度な高さに設定された格子天井で拡散され、室内に柔らかい光が落ちるように工夫されている。平面図、断面図とも派手さはないが細やかな工夫が凝らされ、それらが重ね合わされ三次元となって、豊かな空間が現れてくる秀作である。ただ少し残念なのは、南側の園庭に対する提案があまりなく、もう少し外部に対して積極的に働きかけ、内部空間と外部空間を統合した形で提案がなされていればより魅力的な作品となったものと思われる。  
(中村)